



特定医療法人社団

# 鵬友会 ニュースレター

鵬友会ホームページ アドレス  
<http://www.hoyukai.org/>

第92号

発行:2013年12月15日  
発行責任者:  
特定医療法人社団 鵬友会  
事務局長 池島 守



## 創立三十周年を迎え新たな一歩を ～患者になって感じたこと～

新中川病院 薬局長 仁科 周興

医療法人社団鵬友会は、今年で創立30周年を迎えることができました。私は、湘南泉病院の前身である阿久和病院の時代から勤務させていただいております。

阿久和病院は、周囲を木々で囲まれた小高い丘の上であり、近くには養豚場、陽だまりでは蛇が昼寝をし、夏にはカブトムシが飛び込んで来るといった環境に存在していました。当時は、このような場所で病院として大丈夫だろうかという心配やスタッフも少なく苦労も多々ありましたが、家族のような団結力で一步一步前進していきました。

今日の鵬友会の発展を見るたびに、その歴史の中に自分が居たこと、そしてがんばってきて本当によかったとしみじみ感じさせられます。また、30年という長い年月を無事勤め上げることができたのは、歴代理事長及び院長が培ってこられた理念の素晴らしさと、諸先輩、同僚、後輩の皆様がたのご指導と惜しめない協力の賜物だと思っております。今後は新たな一歩を踏み出し鵬友会の発展のために懸命の努力をしたいと思っております。

私事ではありますが、昨年生まれてはじめて「入院」を経験しました。そして恥ずかしいことなのですが、はじめて患者心理が少し理解できたような気がしました。病気によって異なるかもしれませんが入院時は、治療することによって健康になるという明確な目標があるので、不安と闘うことができます。治療開始前は、はじめての入院による緊張や、様々な検査をするので、不安を感じる暇もなくプラス思考でいられます。いざ治療が開始されるとベッド上にいる機会が増え、薬剤による副作用症状が次々と襲ってきて、精神的に不安定になり、今まで何とも思っていなかったことに、敏感になりマイナス思考へ加速していきます。治療がうまくいくのかという不安や、薬剤の副作用、復職できるのか、経済面での不安に襲われてくるのです。強い不安感、焦燥感、攻撃性を伴うイライラ感等、抑うつ状態を呈していたと思います。このような副作用症状がでることは、十分理解していたので苦しみながらも努めて明るく振る舞っていました。安定剤も睡眠導入

剤も処方されていましたが服用することに抵抗がありそのまま放置していました。

ある時それに気づいたのか看護師さんが「いかがですか？病院勤務で忙しい毎日を過ごしてこられたのだからこんな機会はめったにないと、お薬を飲まれて少しはゆっくりされたいいかがですか。人間健康が第一ですよ。」という声かけをしてくださりました。自分が仕事への早期復帰等で精神的に焦っていた時に、この言葉をかけられほっとしたというか張りつめていたものが、楽になり抵抗なく処方されていた薬を服用し、コミュニケーションも自分から取るようになりました。

もし服用するよう一方的に指摘されていたら素直に聞き入れていたかわかりません。このように相手の考えていることや立場等を理解し、患者様に接することが今まで自分自身できていたのだろうかと考えさせられました。笑顔とアイコンタクトの重要性にも気づかされました。今後は、笑顔がありきちんと目を見て、あなたのお役に立ちたいと思っていることを感じさせられ、患者様がコミュニケーションを築きやすい医療従事者になれるよう心掛けていきたいと思っております。

患者様の求める思いにしっかりと向き合い、院内のコミュニケーションを良くする、このことが危機管理にもつながっていくと思います。患者中心の医療を理念として掲げているのであれば、スタッフ全員が理念を理解し自信をもって自分の行動の規範とし、患者様に接し、語りかけていくことが重要だと思います。治療に専念する時間をいただき感謝するとともに、ご迷惑をおかけしたことを心よりお詫びいたします。

来年度の最大の目標は、新中川病院の「病院機能評価」受審です。大変困難な目標ですが、福田院長を中心に「病院をさらに良くして、患者様により良い医療を提供するための基盤づくり」を目指し、職員が一丸となり、職員一人一人のスキルアップを図り、「病院機能評価」の受審の準備をしていきたいと思っております。皆様方のご指導、ご協力をよろしくお願いいたします。

# 第22回 市民向け医療・福祉講座 開催！

平成25年11月22日（金）17時10分より市民講座を開催しました。今回のテーマは『認知症患者のBPSD（行動・心理症状）に対する対応』。日野院長の基調講演をはじめ、原科副看護部長の講義、横浜ほうゆう病院職員4名のロールプレイ（寸劇）を行い、BPSDに対する横浜ほうゆう病院での経験から蓄積されたより実践的な医療・介護について発表させて頂きました。当日は、認知症患者の家族の方や施設関係者など、約90名の方にご参加頂きました。



【会場風景】

## ◆基調講演「BPSDとは何か」◆

日野院長は介護者にとって切実な問題であり、社会的にもさまざまな課題を抱えているBPSD（認知症に伴う行動・心理症状）について、【BPSDとは何か】をテーマに講演を行いました。

BPSDとは、物忘れや判断力の低下などの「中核症状」に伴って現れる精神・行動面の症状である「周辺症状」にほぼ重なる概念であり、行動症状（身体的攻撃性、徘徊、不穏、焦燥、逸脱行動・性的脱抑制、落ち着きのなさ、叫声）、心理症状（妄想、幻覚、睡眠障害、抑うつ、不安、誤認）が挙げられると説明。また、認知症の種類（アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症、前頭側頭型認知症）によって出現するBPSDは、異なることや、BPSDの出現で介護者が混乱し、不適切なケアが行われることによって、BPSDが悪化するという悪循環が起こることを述べ、BPSDに対する介入の原則として《①症状を正確に評価 ②標的症候を定め、治療方法を選択 ③まず非薬物療法を検討し、効果不十分な場合に薬物療法を検討》が大切だと強調し、介護者のBPSDへの対応を症状ごとに述べました。



【佐藤看護部長】 【澁谷副院長】



【日野 院長】

## ◆講義「BPSDに対する実践的な対応方法」◆

原科副看護部長は、〈名前がわからない、記憶がなくなる、服の着方がわからない、道具の使い方がわからない、品物を見ても何かわからない、段取りや計画が出来ない、料理の段取りや味付けが出来ない〉といった中核症状によって、本人は周囲で起こっている現実を正しく認識することが困難となり、いろいろなトラブル（抑うつ、徘徊、不穏、幻聴、無気力、不眠、攻撃、大声、焦燥）になりやすいと述べ、そうならないために、周囲は本人の自尊心を傷つけないように、本人の気持ちになり、本人の目線に立って対応することが重要であると説明し、【介護者がストレスを溜めないように、発想の転換を！】と強調しました。



【原科副看護部長】

## ◆ロールプレイ「私の財布返して」◆

後半では、2名の講師の講演内容を受けて、「私の財布返して」と題したロールプレイ（寸劇）を行い、BPSDの対応方法の一例をわかりやすく解説しました。

ロールプレイの内容は、息子から貰ったお金を、どこにしまったか分からなくなった母が「嫁が盗んだ」と大騒ぎしています。

※会場からも、4名の方に飛び入り参加してもらい大盛り上がり！！



【前沢事務部長】



ナレーター役  
の村山科長！



息子にお金を要求  
する母「少しだけ  
ちょうだいよ」



会場から飛び入り参加  
し、一緒に財布を探し  
ています。  
【左：患者ご家族様】



3人で財布を探し、母自身  
が見つげ出せるように工夫。  
【左から：江村・本田科長・  
加藤科長】